

点検評価ポートフォリオ 名桜大学

2023 年 10 月

目 次

大学の概要	1
I「地域貢献活動、教育活動の取組み」に関する点検評価資料	3
1) 地域貢献活動の取組み	4
タイトル:「学生が主体的に学ぶプロジェクト学習について」	
資料 1: 沖縄北部方言ポスター	7
資料 2: 絵本「シマノトペ」	11
資料 3: ヘルスリテラシー演劇発表会	13
2) 教育活動の取組み	17
タイトル:「学生ピアによる学修支援について」	
資料 4: 言語学習センターの取組状況	20
資料 5: 数理学習センターの利用状況	21
資料 6: 自然科学特別講義「統計学基礎」	22
資料 7: 2023 年度(前期)数理学習センター(MSLC)の利用状況 ...	28
資料 8: ライティングセンターの利用状況	34
資料 9: ライティングセンターの利用状況等 科目: 現代思想	35

大学の概要

(1) 大学名

名桜大学

(2) 所在地

沖縄県名護市為又 1220-1

(3) 学部等の構成

学 部：国際学部、人間健康学部

研究科：国際文化研究科国際文化システム専攻（修士課程）

国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）

看護学研究科看護学専攻（博士前期課程）

看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（修士課程）※令和 6 年 4 月 1 日開設予定
専攻科：助産学専攻科

その他の組織：リベラルアーツ機構（言語学習センター、数理学習センター、ライティングセンター）

(4) 学生数及び教職員数（令和 5 年 5 月 1 日）

学生数：学群/学部 2,114 名、大学院 31 名

専任教員数： 121 名（学長及び助手 4 名含む）、

専任職員数： 55 名

(5) 理念と特徴

○建学の精神

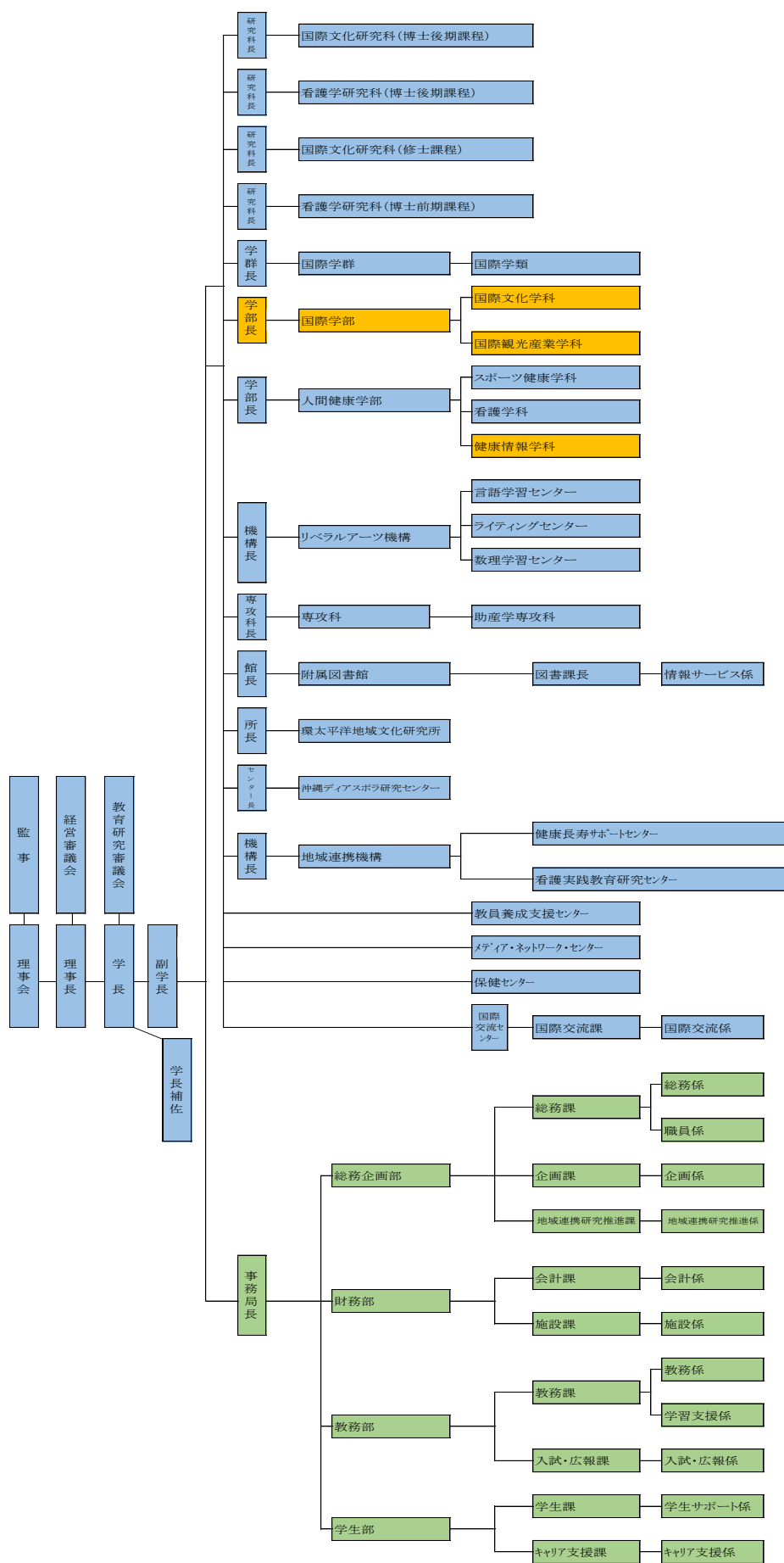
「平和・自由・進歩」

- 1) 名桜大学は、平和を愛し、自由を尊重し、人類の進歩と福祉に貢献する国際的教養人と専門家の育成を建学の精神とする。
- 2) 平和を希求し 自由を尊重し進歩を標榜する。

名桜大学は、建学の精神「平和・自由・進歩」を基本理念とし、「国際社会で活躍できる人材の育成」を教育目標として、次のような人材を育成することを目指す。

1. グローバル化に対応できるコミュニケーション力（英語を含む外国語力、母語によるライティング力）、数理的分析能力、ICT 活用力を持った人材
2. 豊かな教養と専門性、総合的な判断力と論理的な思考力、創造性、協調性、積極性、自立性、主体性を併せ持ち、生涯学び続けることができる人材
3. 自由な発想のもと、俯瞰的に問題を把握し解決する能力を有し、知性と感性のバランスのとれた円満な人格を備えた国際的教養人

(6) 大学組織図



I 「地域貢献活動、教育活動の取組み」に関する点検評価資料

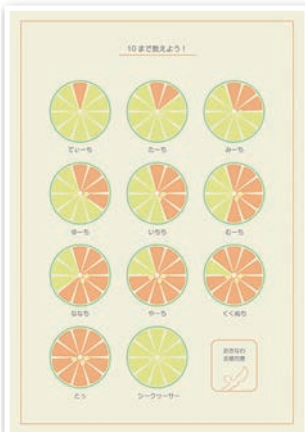
1) 地域貢献活動の取組み

タイトル	学生が主体的に学ぶプロジェクト学習について		
取組の目標	地域の多様な資源を活用した教育研究活動を推進し、地域課題解決に取り組む学生を支援する。		
取組の内容、成果	(1) プロジェクト学習について プロジェクト学習は、学生自らが地域社会に根ざした課題・問題を解決していく中で、生活設計に必要な主体性、創造性、計画性の獲得を目指す授業科目である。特徴として、学部・学科・学年を超えて集まった学生たちが、チームワークを発揮しながら、地域協力者（自治体、地域住民、高等学校、企業等）と連携し、モノづくり、システムづくりなどの解決策を提案する。		
	(2) これまでの実施状況について プロジェクト学習は、ひとつのプロジェクトの期間を 3 年間と限定し、平成 29（2017）年度から開始した。これまで「スポーツ・ウェルネスツーリズム」「健康支援プロジェクト」「道の駅連携」「沖縄北部方言」等、計 6 件のプロジェクトを実施し、延べ 190 名の学生が参加している（表 1 参照）。 表 1：平成 29（2017）年度～令和 5（2023）年度実績		
	プロジェクト名	実施期間	人数（延べ）
	やんばるを起点としたスポーツツーリズム	平成 29（2017）年度～令和元（2019）年度	28 名
	健康支援プロジェクト	平成 29（2017）年度～令和元（2019）年度	52 名
	空き家活用プロジェクト	平成 30（2018）年度～令和 3（2021）年度	21 名
	道の駅連携	平成 30（2018）年度～令和 3（2021）年度	27 名
	沖縄北部方言	令和 3（2021）年度～令和 5（2023）年度	34 名
	障がい者のヘルスリテラシー向上教育の実践	令和 3（2021）年度～令和 5（2023）年度	28 名
	協力団体	伊江島、伊平屋島、屋我地島、名護市青少年育成協議会屋我地支部 為又区、宮里区 大宜味村、東村、羽地地区（真喜屋・仲尾次）、沖縄県移住受け入れ協議会、城コーポレーション、やんばるメモリアルパーク 道の駅北部 4 駅（許田、ぎのざ、おおぎみ、ゆいゆい国頭） 名護市、恩納村、名護高等学校、名護市役所、宮里公民館、恩納村各公民館、沖永良部島、本部町 名桜大学健康教育ヘルスコミュニケーションクラブ、劇団チームスボット・ジャンブル、もとぶ海陽園	
(3) 近年のプロジェクト学習の取組み内容、成果について ①「沖縄北部方言」プロジェクト（令和 3（2021）年度～令和 5（2023）年度実施予定）について 令和 3（2021）年度から開始した「沖縄北部方言」プロジェクトは、沖縄県北部 12 市町村の方言の使用実態を調査し、北部方言に関する問題や課題を探り、解決方法を検討する。 初年度は、北部 12 市町村の現状を把握するため、文献・Web 調査を実施するとともに、方言に関するアンケート調査や危機言語に関する調査報告書の調査を行った。令和 4（2022）年度は、8 名の学生が受講し、対象地域を学生メンバーの出身地である本部町、名護市の方言に絞り、学内者及び地域住民に対し方言の周知活動を実施した。 令和 4（2022）年度の活動は、1）全世代向けの方言ポスターの作成、2）小さい子どもたち向けの貼り絵（絵本）の作成を中心に、方言収集班、ポスター作成班、貼り絵作成班に分かれ、毎週の全体ミーティングに加えリーダー会を定期的の実施し、活動を進めた。 1）全世代向けの方言ポスターの作成は、語彙収集で集めた本部町東方言 146 語彙、名護市大北方言 111 語彙の中からいくつかの単語を使用して作成した。作成したポスターは、名桜大学祭当日に来場者の目に留まるよう通路などに掲示し、より多くの方に方言に興味・関心を持ってもらえるよう周知活動を実施した。【資料 1：沖縄方言ポスター参照】 2）絵本作成では、絵本展の視察を行った際に注目した「シマノトベ」という絵本を、語彙収集を行った本部町東方言（146 語彙）と名護市大北方言（111 語彙）バージョンをそれぞれ作成し、方言ポスターと同じく名桜大学祭において展示した。今後、作成した絵本は、名桜大学附属図書館ほか、周辺の小・中学校にも寄贈することを考えている。【資料 2：絵本「シマノトベ」参照】 また、継続して周知活動を行うため、沖縄方言プロジェクトのInstagramを開設し、ポスターや展示品にInstagramにアクセスできる QR コードを掲載することで、本プロジェクトの SNS 活動についても周知が行えるよう配慮した。			

	②「障がい者のヘルスリテラシー向上教育の実践」プロジェクト（令和 3（2021）年度～令和 5（2023）年度実施予定）について 本プロジェクトでは、障害者支援施設で生活する障がい者のみなさんの健康や課題の解決に向けてスキル（ヘルスリテラシー）を向上させ、知的障がいがある方々にも分かりやすい健康教育、健康情報の提供方法を探究する。この授業の特徴は、受講者（学生）と健康教育ボランティアサークルの学生、劇団員、障害者支援施設、大学教員が連携協働を体験しながら、プロジェクトの目標達成に向け取り組んでいることである。プロジェクト学習の 2 年目に位置する令和 4（2022）年度は、障がいの特徴から、情報を入手する力、情報を理解する力が弱いと考えられるため、言葉や文字を多用せず、視覚的にイメージして理解を促す（情報提供できる）「演劇を用いた健康支援」を企画した。 劇の創作にあたっては、障害者福祉施設職員を学内に招き、障がい者の方々の生活の様子や健康問題の現状を教えていただき、プロジェクトメンバーの学生たちが学内演習としての演劇ワークショップを通して、障がい者の方々に伝えたい情報を劇のストーリーに託し、情報の受け取り側が「わがごとのように感じる」ことができるよう、対象者の興味関心ごとを調べ、生活の場面を再現する形で演劇を作成した。 また、プロジェクト学習受講者のみの人数では、演劇創作が困難であったため、地域で健康教育活動を行っている看護学科健康教育サークル ヘルスコミュニケーション・クラブメンバーに協力を頂くとともに、さらに劇団チーム・スポット・ジャンブル（劇団 TSJ）の方々、障害者福祉施設の支援員、大学教員が関り、その道のプロフェッショナルの連携協力のもと、充実したプロジェクト学習活動の実践が行えた。【資料 3：ヘルスリテラシー演劇発表会参照】 【演劇発表会】 日時：令和 4 年 12 月 17 日（土）13：00～16：15 場所：本部町谷茶地区公民館 （4）今後のプロジェクト学習の計画について 令和 6（2023）年度から実施するプロジェクト学習は、プロジェクト学習で取り組む課題を、これまで学内教員から募集していたものに加えて学生や地域から課題を募集し、テーマに基づき担当に相応しい教員とマッチングを行い開講することとした。また、プロジェクト期間を 3 年間で限定していたものを 1～3 年間で幅をもたせ、プロジェクトの内容に合わせて、期間を柔軟に設定できることとした。 今後、令和 6（2023）年度の開講に向け、9 月頃を目途に準備を開始する。地域に向けては、北部広域市町村圏事務組合との懇談会等を通じて、周知を行う予定である。
自己評価	プロジェクトを実施するにあたり、地域へと足を運び、多くの人びとと接した学生自身が、地域課題を発掘し把握できたことは、本科目の貴重な成果である。学生は目的をよく理解し、意欲的に取り組んでおり、毎年度成果報告書を作成・提出している。また、プロジェクトの成果や改善点は、報告書を通じて次年度の受講生へ引継ぐなど、プロジェクトの継続性を維持するサイクルが確立しつつある。一方で、この主体的な学びの質を高めるためには、報告会の実施や成果物の公表などの広報活動をより強化し、学内外での認知・理解を促進するとともに、プロジェクト学習への学内支援の在り方を検討し続ける必要がある。

令和4年度 プロジェクト学習報告書

沖縄北部方言
障がい者のヘルスリテラシー向上教育の実践



(沖縄北部方言ポスター)

名桜祭でのポスター展示の様子

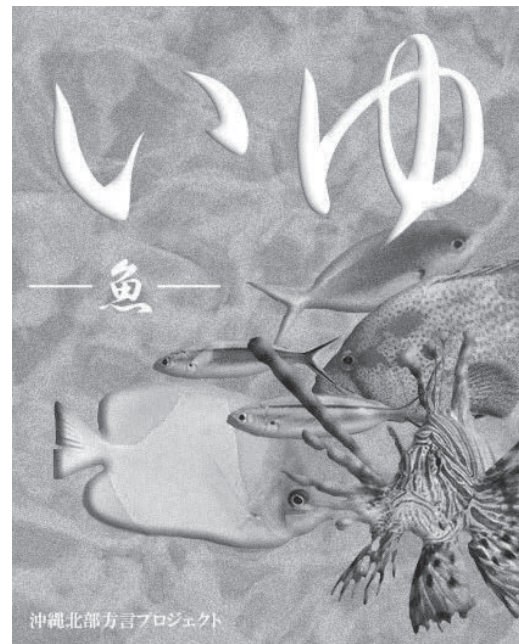
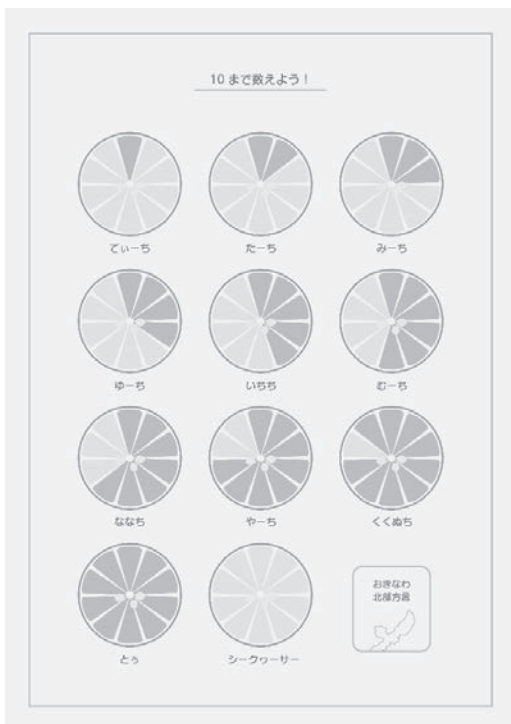
3.



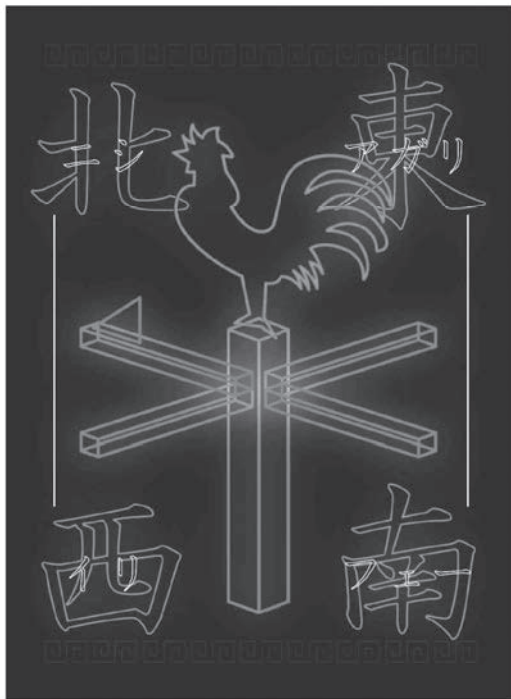
付録A（沖縄北部方言ポスター）



(沖縄北部方言ポスター)



(沖縄北部方言ポスター)



(絵本)

付録B



たのー たのー
おーいーあー?



おじいさん おじいさん
どうしたの?



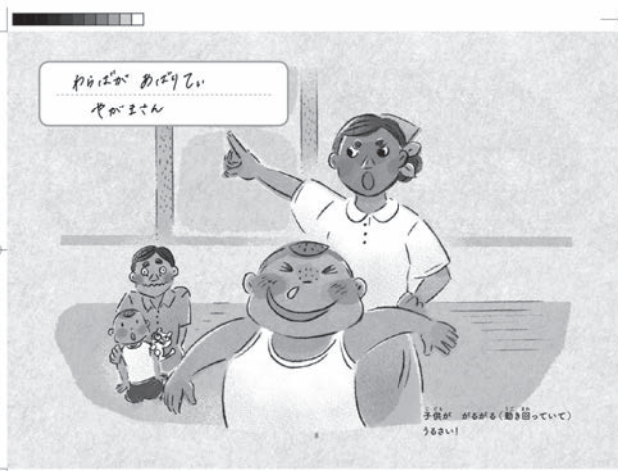
おが おがふ (たくん)
入っているよ

うんー うんー
あーいーあー?



おばあさん おばあさん
どうしたの?

(絵本)



(ヘルスリテラシー演劇発表会)

【ヘルスリテラシー・ワークショップⅧ】

11月26日(土) 3.4限 場所：本部町谷茶地区公民館

【演劇発表会】

12月17日(土) 3.4限

場所：本部町谷茶地区公民館

今回は、第2回目であり、去年は、新型コロナウイルスのためにオンラインでの開催であったが、今年度は、感染症対策を十分に行い、Face to Faceでの実施を試みる事ができた。



もとぶ海陽園
こうりゅうかい
交流会

日時: 令和4年12月17日(土)
午後2時30分～3時30分
場所: 本部町谷茶地区公民館
参加者: 海陽園のみなさん 名桜大学学生
劇団チーム・スポーツ・ジャンプル

〈プログラム〉 司会: 三代野 卓 (海陽園)

午後3時: 開会のあいさつ
名桜大学学生あいさつ
演劇(演題) 『名桜大生発表会』
海陽園利用者さんのことば(感想など)
海陽園施設長のことば
閉会のあいさつ ※午後4時 退館

2)健康教育演劇発表会 令和4年12月17日(土)

海陽園の障がい者のみなさんと職員(施設長、担当者)の方を、本部町谷茶地区公民館にお招きし、健康教育演劇の発表会を行いました。

プロジェクト学習健康教育劇発表会

『 それいけ！めっちゃヘルス！

～ 今日の私と、未来の私 ～ 』

2022年12月17日(土)

場所：本部町谷茶地区公民館

内容：はじめの挨拶(プロジェクト学習 ○○○さん)

1)劇①

2)劇② 二人の人生 ～ ケンコウ(健康)さんとタイダ(怠惰)さん ～

3)劇③

4)ピカレンジャー体操(全員)

さいごの挨拶(プロジェクト学習 ○○さん)

1) 劇①

〈 内容 〉

海陽園で実際に行われているピカレンジャー体操を取り入れた劇。

いつも、参加しない2人の利用者。しかし、周囲が楽しそうにピカレンジャー体操を踊っているのに触発され、最後は、楽しくみんなでピカレンジャー体操を行えるように！

みんなで、体を動かすことは楽しいということを伝える。



参加しませんね、
どうしたら参加してくれますかね？



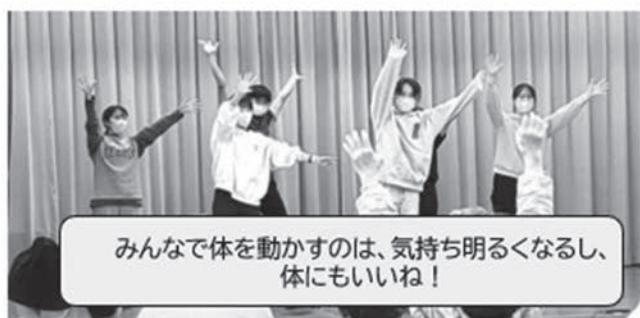
ピカレンジャー体操
楽しそうだな。。。

1) 劇①

みんないないな、！
一人でピカレンジャー体操
やってみようかな！



あっ！
踊ってる！



みんなで体を動かすのは、気持ち明るくなるし、
体にもいいね！



2) 劇②



タイダさんのようにならないよう、
みんなで健康を守っていこう！



3) 劇③

〈 内容 〉

食事の内容について、バランスの良い栄養を取ることの大切さを伝える劇。

お肉ばかり食べている人、お肉と魚を食べる人、お肉と魚と野菜を食べている人、3者の体の中を小道具を用いて、わかりやすく、食事内容による体調の変化について伝える。



3) 劇③



みなさん
この3者のうち、
どの人になりたいですか？



4) ピカレンジャー体操



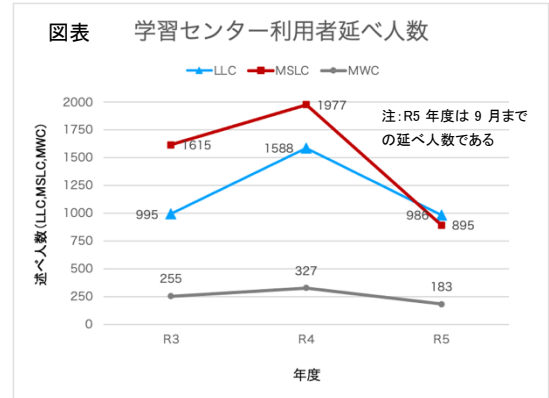
利用者さんも立って私たちと一緒に
ピカレンジャー体操を踊ってくれました。

アンコールもあり、好評でした！！



2) 教育活動の取組み

タイトル	学生ピアによる学修支援について
取組の目標	学生ピア ^{注1} による学生支援・学修支援を推進する。
取組の内容、成果	全学的に学生の主体的な学びを展開・推進するため、リベラルアーツ機構の下に3つの<u>学生による学習支援組織を設置している</u>。①外国語力の養成を目的とする言語学習センター（2001年開設）、②数理的能力の養成を目的とする数理学習センター（2009年開設）、③学術的文章作成力の養成を目的とするライティングセンター（2015年開設）である。この3つのセンターでは、一定レベルのトレーニングを受けた学生チューターが、<u>教養教育科目と専門教育科目について、それぞれの一部と連携しながら、当該科目の受講学生を中心に課題等の取組みのサポート（連携授業）を行っている</u>。また、チュータリング^{注2}やセンター運営の補助業務を通じて、学生チューター自身の外国語・数理・ライティングの能力向上とともにコミュニケーション力をはじめとする社会人基礎力の養成も進めている。 なお、各センターの利用者延べ人数は図表のとおりである。 （1）言語学習センター：本センターは、学生の外国語能力の向上と自主学習促進を目的としている。国内の大学に先駆けて導入した米国教育機関から認定されたプログラムに基づいてチュータートレーニングを実施している。チューターは本プログラムによりトレーニングを受け、実際の運営業務をこなしながら OJT（On the Job Training）によってチュータリングに必要な知識・技術・技能・態度の向上を図っている。 学習支援では、教養教育科目の外国語（英語、中国語、スペイン語、日本語など）や、英語リメディアル教育に力を入れるとともに異文化理解に関するワークショップを開催することで、授業及び正課外の語学学習において、計画的・継続的に学習支援を行っている。チュータリングは、個別形式（1対1）を基本とし、連携授業での講義課題、英会話練習や検定試験対策など行なっている。特に、1年次の英語科目（ベーシック・イングリッシュ、イングリッシュコミュニケーション）での活用頻度が高い（資料4 LLC 利用内容（2021～2023））。要因としては、授業（シラバス）において、LLC の活用方法などを含め、チュータリングの利用を促す課題が設定されていることである。授業の中で LLC 学習センターの活用方法を知ること、資格取得や英会話練習などのスキルアップを目的とした学習センターの活用が可能となる。 現在、多言語に対応するチューターの育成を積極的に実施しているが、授業連携につながる言語は英語の1言語が突出している。そのため、基礎科目に加え第2外国語の履修の中でも LLC 学習センターとの授業連携を強化することが検討課題である。 全学生を対象とした2022年度学生生活実態調査の「言語学習センター利用に対する満足度」において、「満足」38.7%「やや満足」33.3%を合わせ、72.0%が肯定的な回答であった。 （2）数理学習センター（MSLC）：本センターは、「数理能力の向上」「自己調整学習の促進」を目的として、学習支援、MSLC 運営、チューター育成プログラムを業務としている。 学習支援では、連携授業の支援（「統計学基礎」「数学」「統計学」「診療情報科目」「情報科目」）や、各種対策講座（「SPI 対策講座」「数検対策講座」「各科目の対策講座」）を支援している。チュータリングは、個別形式（1対1）、グループ形式（2人～3人）、講義形式（3人以上～）により、状況に応じた形態で実施し、学生の疑問や質問へのアドバイス、学生の自主学習を手助けするための助言を行い、答えを導くためのプロセスと一緒に考えることに重きを置いている。 連携授業においては、主に1年次の教養教育科目における連携が主となっており、中でも、数学基礎力に課題を抱えた学生を対象とした科目「統計学基礎」の活用頻度が高く、次に、「数学」「統計学」と続いた（資料5 数理学習センター利用状況等：MSLC 利用内容（2021～2023））。「統計学基礎」受講生の学習前後の試験結果から、学習支援の成果を可視化した結果、MSLC の利用回数が多い受講生は



	ど、平均点が高く、学習前後の達成度が高い傾向にあった。(資料 6 自然科学特別講義「統計学基礎」) また、数学では、受講者の学習状況の自己調整学習の自己評価で、「学習意欲、計画的学習、反省点を考える、改善策検討、効果的な学習方法を検討する、徐々に目標上げる、目標は達成できる」という 7 項目において、MSLC の利用回数の多いグループが少ないグループより達成状況が高い結果であった(資料 7 数理学習センター利用状況等)。さらに、MSLC 運営では、利用者状況の把握(受付、データ管理)、MSLC の広報、新規チューター育成を行なっている。チューター育成プログラムでは、計画的なチュータートレーニングを実施し、「マネジメント点検表」の作成によって個々のチューターが自身の PDCA サイクルを繰り返し、都度、チューターのディスカッションを経て改善を図っている。また、毎週、問題解決的指導を基本としたチュータリングロールプレイ^{注3}や、コミュニケーションスキルやスタディスキル等を磨くためのプレゼンテーションによるトレーニングを実施することで、チューターのスキルアップを実現している。加えて、全学生を対象とした 2022 年度学生生活実態調査の「数理学習センター利用に対する満足度」において、「満足」50.4%「やや満足」32.1%を合わせ、82.5%が肯定的な回答であった。 (3) ライティングセンター (MWC) : 本センターは、自立した書き手を育てることを目指し、学生のチューターが個人指導によるチュータリングという方法を通して学生の文章作成の支援を目的として、チュータリングの実施、センター運營業務(事務調整、広報、記録、報告書作成)、人材育成、チューター自身のスキルアップを業務としている。2017 年度からチューター育成プログラムを体系化し、学生間でもチューター指導の補助が実践できるようになった。チュータリングは、①文章の構成や表現など、悩みや困っていることに対応。②学生との対話を通して「気づき」を促す支援。③一方的な添削は行わない(書く主体は学生)。④1 回のチュータリング時間は 45 分としてサポートを行なっている。チュータリングに関するイレギュラーな事案や検討事項について情報共有し課題解決に努めている。 連携授業では、「アカデミックライティングⅠ」「アカデミックライティングⅡ」「大学と人生」「現代思想」「体育スポーツ史」「体育原理」の 6 科目が設定されている。主に、1 年次の教養教育科目における授業連携が主となっており、中でも、「アカデミックライティング」での活用頻度が高く、次に「現代思想」と続いている(資料 8 ライティングセンター利用状況等：MWC 利用内容(2021～2023))。MWC の利用効果を評価するために、MWC のチュータリングを利用した学生と、利用しなかった学生のレポート得点を経年比較した。対象となる授業は「現代思想」で、MWC 利用者のレポートの得点が、非利用者より高い結果となった(資料 9 ライティングセンター利用状況等：科目：現代思想)。一方で、他の学習センターと比較して、利用数が少ない(図参照)。独自 HP を立ち上げてセンターの情報の発信、リーフレットの作成や SNS の活用、関連図書の購入・閲覧、チュータリングの予約期間の短縮等の利用者数の向上策を実施しているが、要因としては、利用頻度が高い、全 1 年次対象の必修科目(「アカデミックライティングⅠ」)との授業連携がうまく実践できなかったことに利用者数減少の大きな原因があると考えられる。今後、全連携授業科目において、MWC 利用前後の得点比較を実施する必要がある。 また、チューター育成プログラムでは、文章判断力、文章作成支援に係る対応力、コミュニケーション力、チュータリング技法、文章作成力を習得する必要となっている。それらは、チュータリングの現場で想定される教材を使用した文章診断及びチュータリングの聴講、観察、現場を経験する実施研修を行い、チューターとして独り立ちできるまでのスキルを 3 ヶ月～4 ヶ月で速成する。そして、独り立ち審査を経て、チューターとしてデビューした後においても、年 2 回(前期 1 回、後期 1 回)ライティングスキルの向上を図っている。さらに、全学生を対象とした 2022 年度学生生活実態調査の「ライティングセンター利用に対する満足度」において、「満足」46.1%「やや満足」31.3%を合わせ、77.4%が肯定的な回答であった。
自己評価	専攻・学科を超えた、学部生による学部生のための主体的な学びを推進する体制が確立している。この主体的な学びの質を高めるための学習支援の成果の可視化についても、IR 室とも連携しながら調査・分析することが可能となった。今後は、過去の各センターの学生ピアの支援活動の課題を分析したうえで、センター利用者を対象とした効果指標を設定し評価するとともに、より良い支援の在り方を模索し続ける必要がある。

用語説明

注 1：学生ピア

同じ立場のものの同士の支え合い。ピア（peer）は、同僚、仲間を意味する。

注 2：チュータリング

チューターは家庭教師、個人教師の意味で、チュータリングは家庭教師のように、学習に関する指導やサービスを行うことをいう。

注 3：チュータリングロールプレイのトレーニング

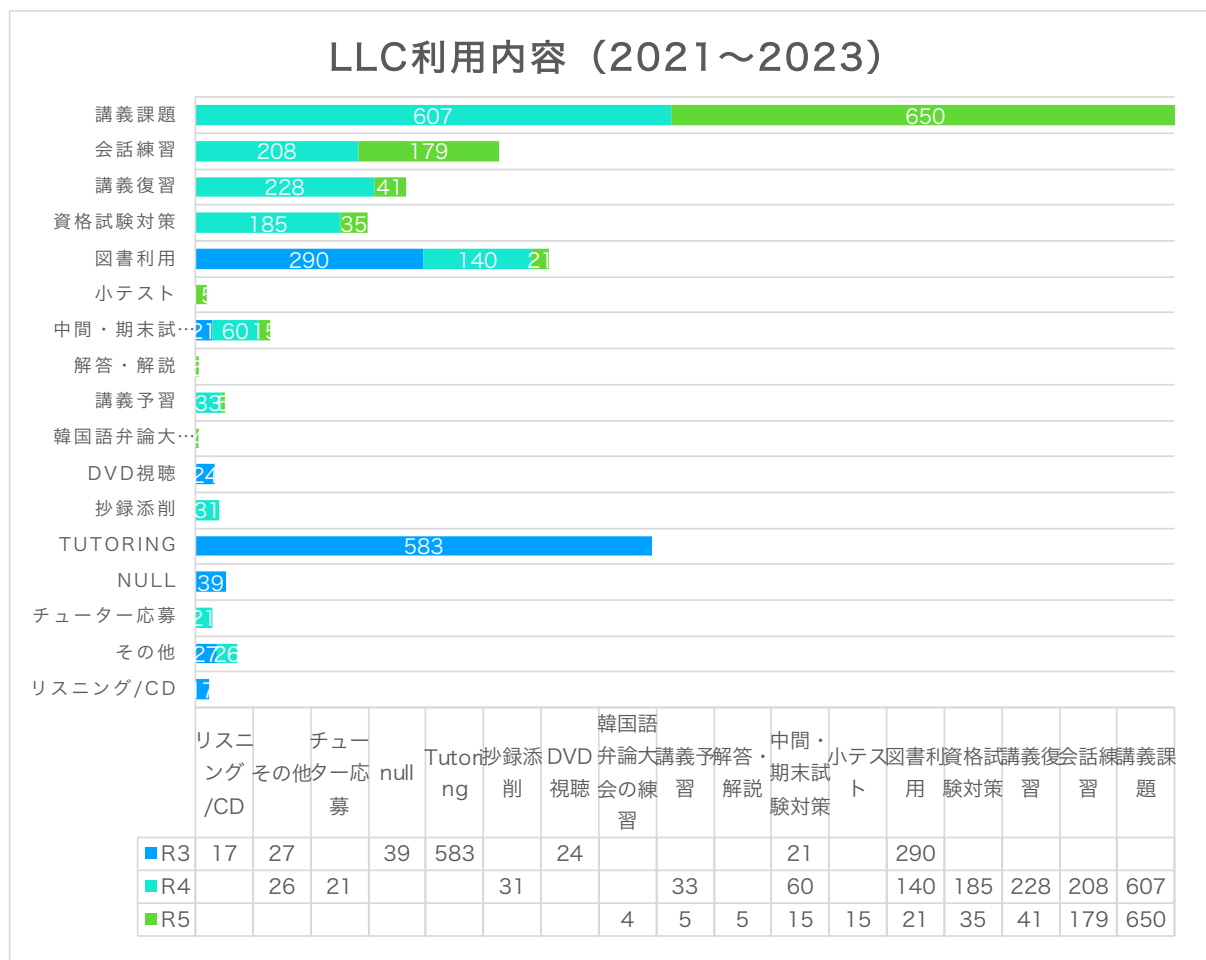
MSLC チューターの企画する講座には、予め時間を設定して複数人を対象とする集団のチュータリングを行う場合と、個々のチューティーの時間に合わせて個別にチュータリングを行う二つのパターンがある。そこで、全チューターを対象として行うチュータリングロールプレイでは、毎回担当チューターを 1 人決める。その担当チューターは事前に教員の指導を受け、リハーサルを行い、模範となるようなチュータリングを目指す。併せて集団と個別それぞれのチュータリングを想定して以下の形式でチュータリングロールプレイを実施している。

一つ目は、全員がチューター役かチューティー役になり、ペアーで行う。二つ目はチューター役とチューティー役の代表ペアーが全員の前で行う。三つ目は、集団チュータリングを想定して、一人のチューターがチューター全員に対してチュータリングを行うパターンである。その際、全員がより主体的にチュータリングロールプレイに参加するために、用語や定義等の説明やそれに関する質問の仕方について、各自が対処法を提示し合い、グループディスカッションを行ってからチュータリングロールプレイをすることもある。

名桜大学 高安美智子，数学の学習支援におけるチュータリングスキルの育成－チュータリングの型を用いたトレーニング方法を通して－，リメディアル教育研究 第 17 巻 2023, p.26



言語学習センターの取組状況





数理学学習センターの利用状況等

MSLC利用内容（2021～2023）



自然科学特別講義「統計学基礎」

1. 自然科学特別講義「統計学基礎」受講者の年度別 MSLC 利用状況

表 1 年度別 MSLC 利用状況

	2021 年度前期	2021 年度後期	2022 年度前期	2022 年度後期	2023 年度前期
受講者数	32	29	42	31	30
実人数	31	29	41	29	30
延人数	265	199	458	351	419
利用率%	96.9	100	97.6	93.5	100
平均利用回数	8.5	6.9	11.2	12.1	14.0

2. 2023 年度(前期) 統計学基礎

(1) MSLC 利用回数と課題提出回数

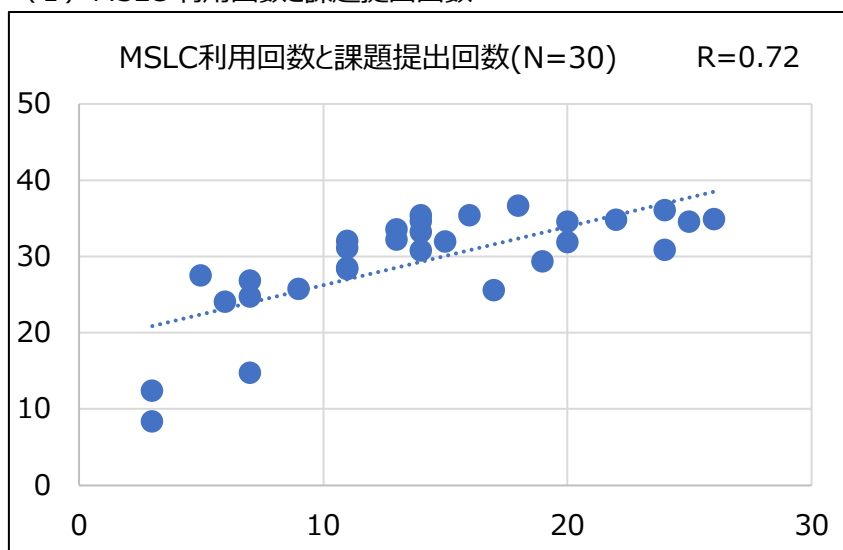


図 1 MSLC 利用回数と課題提出回数の散布図

[考察]

- ・統計学基礎の履修者は、数学基礎力に困難を抱えている学生なので、MSLC の利用を積極的に促している。そのため、利用率は例年 9 割以上である（表 1）
- ・MSLC の利用回数が多い人ほど、課題提出数が高い(図 2)。
- ・MSLC の利用で加点することはないが、課題提出状況は総合得点に成果として表れる。

(3) MSLC 利用回数と総合成績との相関

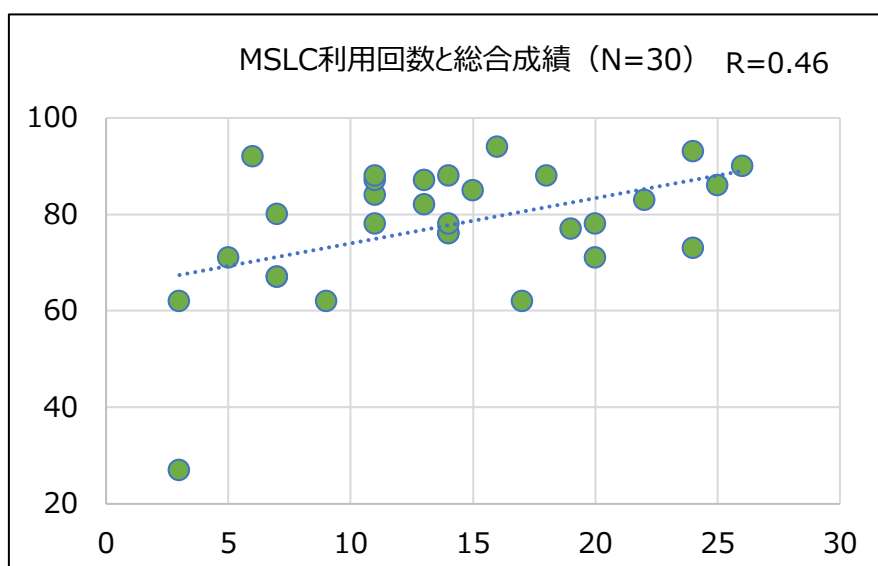


図 2 MSLC 利用回数と総合成績の散布図

[考察]

- ・統計学基礎のテストは、60 点未満の人は何度も再試験を行っている。
- ・授業外学習として課している予習・復習課題等は、総括評価に反映させている（20%。）そのため、MSLC 利用回数とは課題提出状況の得点には強い相関があるため、MSLC の利用回数と総合成績には、相関が見られる。
R=0.46 （図 2）

(4) 2023 年度 授業外学習の効果測定

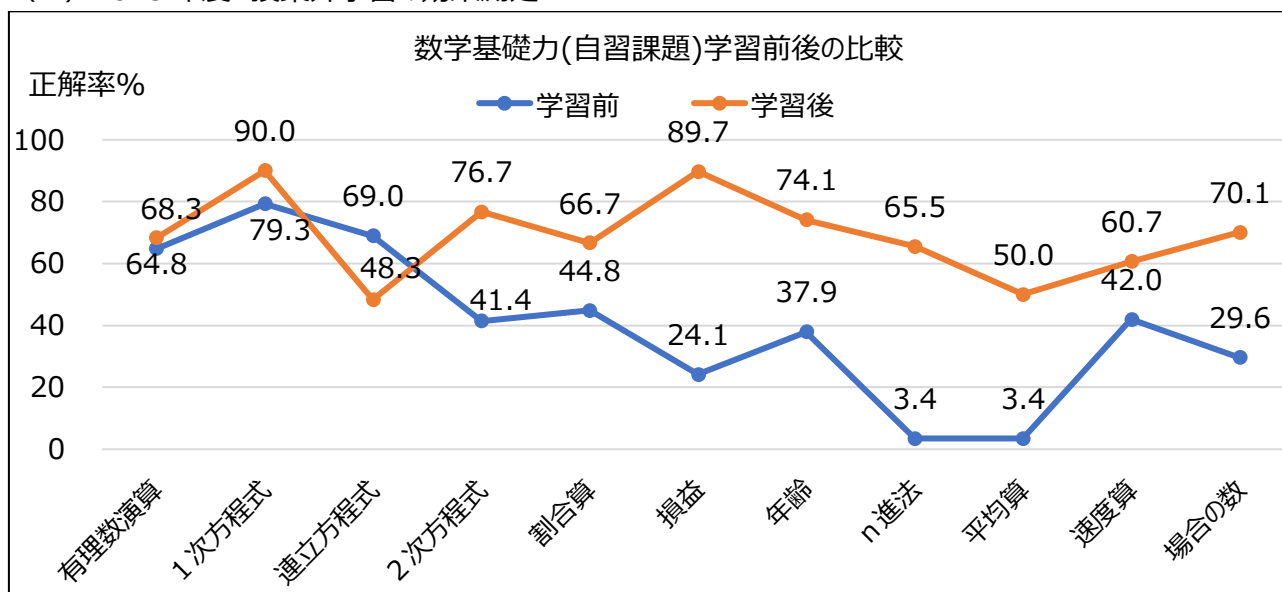


図3 授業外学習の効果測定

[考察]

MSLC の支援を受けて授業外学習の課題を自主学習として課しており、授業でその達成度を評価する。学習前とは、第1回の授業で基礎力診断テストを実施し、その達成度を見るために授業で基礎力テストを4回実施する。図3は4回のテストで実施した単元別の学習前後の正解率を比較したグラフである。連立方程式は、難易度の違いもあり、正解率が下降している。平均算は、公務員試験の過去問題からの出題であったが、5割の受講生は正解している。

(5) 受講前後の自己評価

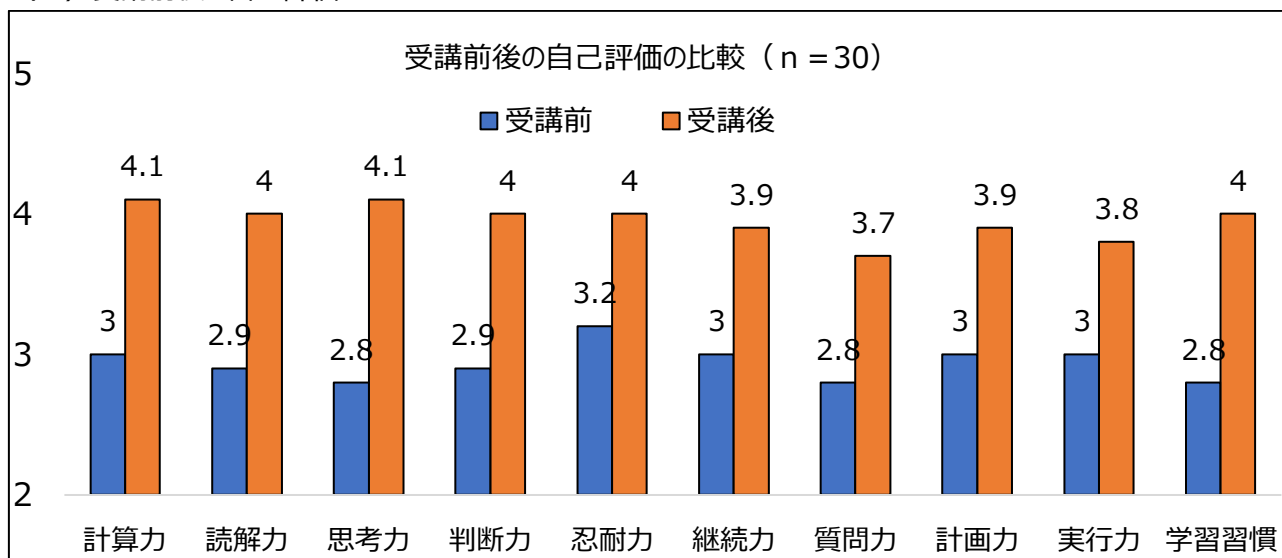


図4 学習前後の力の自己評価 (5件法)

[考察]

この授業では、授業内でも授業外でも主体的な学習により計算力や読解力、思考力、判断力等の向上を目標としている。また、初年次教育科目として、学習習慣を身に付け忍耐力、継続力、質問力を身に付けるとともに、学修の自己管理を促し、計画力や実行力を自ら高めるよう努力することを求めている。諦めず、最後まで課題をやり遂げたという達成感を感じて、専門への学びに繋げることがねらいである。最も変化が大きかったのは、思考力で次に学習習慣となっている。今後も継続してMSLCを活用しながら就職試験対策まで頑張ってもらいたい。

3. 2022 年度（前期） 統計学基礎

（1）MSLC 利用回数と課題提出の相関

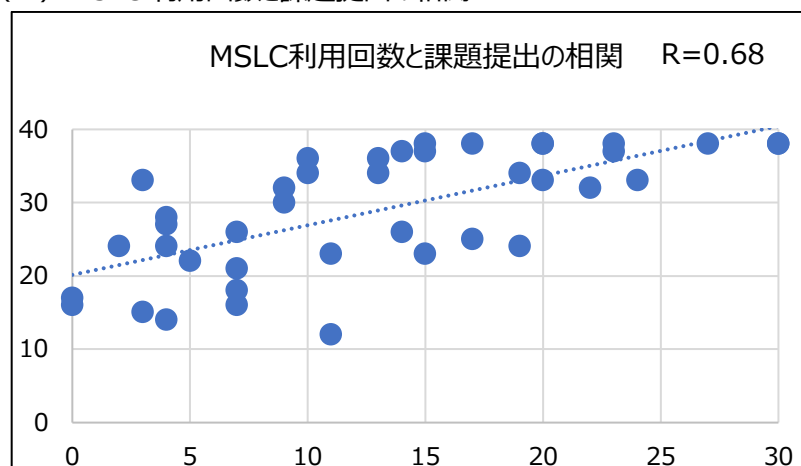


図5 MSLC 利用回数と課題提出の散布図

[考察]

- ・MSLC 利用回数と課題提出には、正の相関がある（ $R=0.68$ ）。
- ・数学基礎力に苦手意識のある学生が履修しているため、MSLC の学修支援を受けながら課題をやることを奨励している。MSLC 利用回数が少ない人は、まとめて課題点検を受けることがあるが、全体的には課題提出回数が少ない。

（2）MSLC 利用回数と基礎力テスト平均の相関（ $N=40$ ）

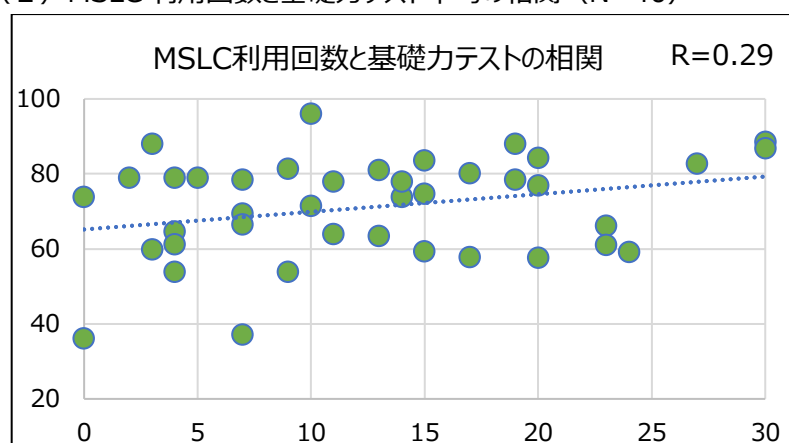


図6 MSLC 利用回数と基礎力テスト平均の散布図

[考察]

- ・基礎力テストは、MSLC が支援している授業外学習のリメディアル学習及びSPI 学習の成果を測定するために授業内で実施している。
- ・MSLC 利用回数と基礎力テストの平均点には弱い相関がみられる。

（3）授業外学習の基礎力テスト第1回～第4回の実施状況

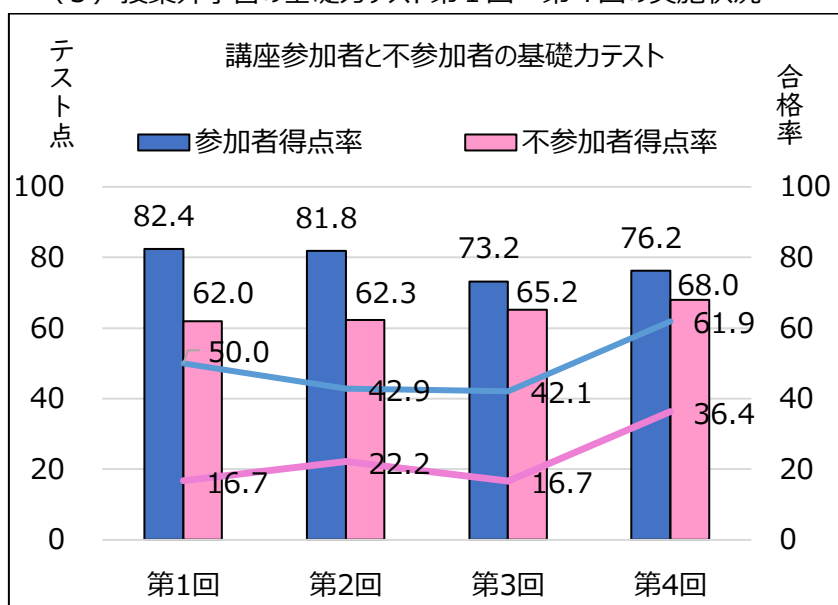


図7 講座参加に関する基礎力テストの平均点及び合格率の比較

[考察]

- ・本学期的4回の基礎力テストの結果は、MSLC の対策講座に参加した人は、不参加の人より毎回平均点が高く、合格率も高い結果となった。
- ・この授業では、基礎力テスト 8 割以上（合格）を目標としており、4 回中少なくとも 1 回はクリアするように促している。図7の折れ線は 8 割以上取った人の割合を表している。講座に参加した人が合格の割合も高い結果となっている。

4. 2022 年度（後期） 統計学基礎

（1）MSLC 利用回数別グループと基礎力テスト平均点の比較

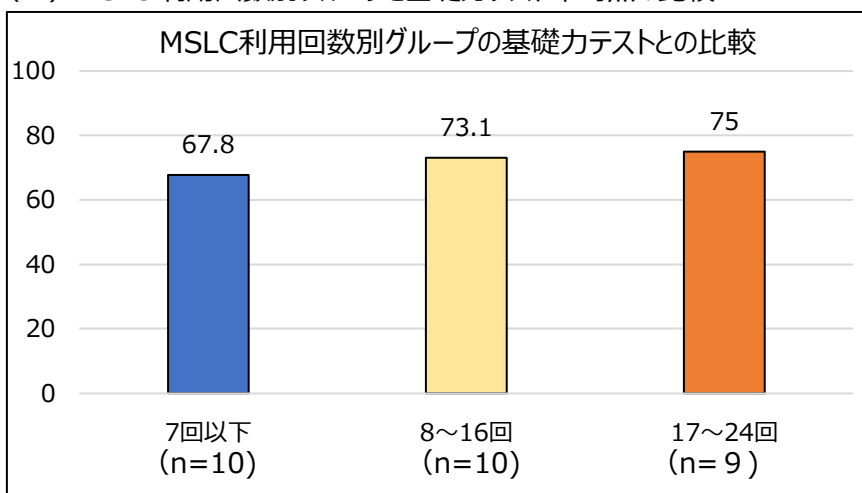


図8 MSLC 利用回数別グループと基礎力テスト平均点の比較

[考察]

- ・MSLC 利用回数を 3 グループに分けて、4 回の基礎力テストの平均点を比較した。
- ・利用回数が多いグループほど基礎力テストの平均点が高かった。

（2）MSLC 利用回数とテスト点の相関

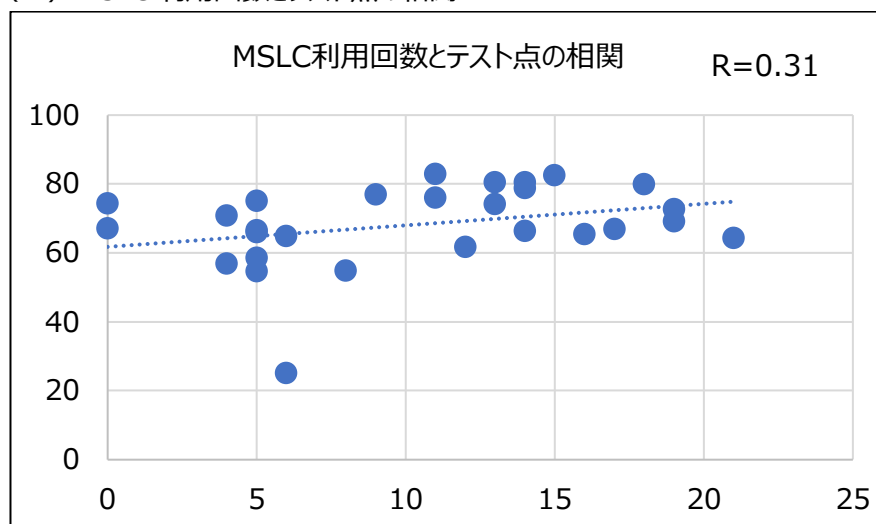


図9 MSLC 利用回数とテスト点の散布図

[考察]

- ・テスト点とは、4 回の基礎力テスト、中間試験、期末試験の平均点である。
- ・MSLC 利用回数とテスト点には弱い相関が認められる。
- ・MSLC では、テスト対策講座を開催し、数学基礎力向上を支援している。

（3）MSLC 利用回数と総合得点の相関

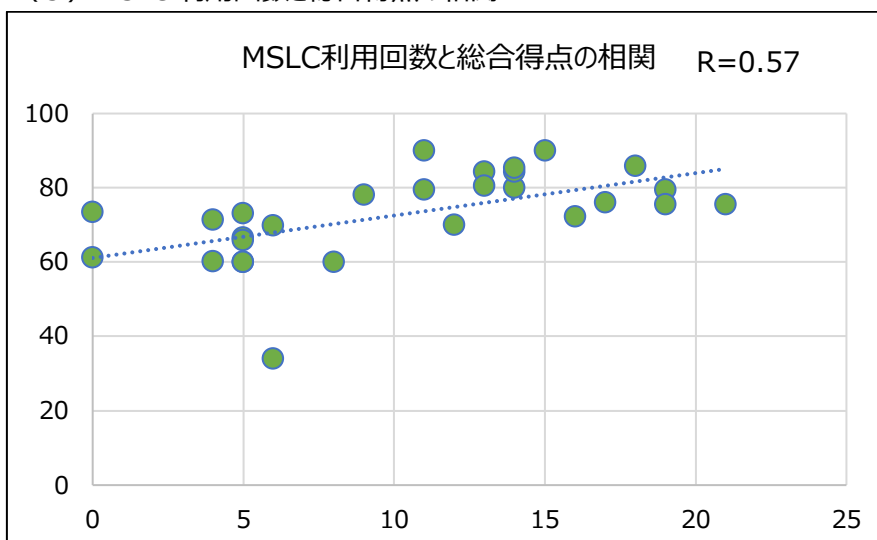


図10 MSLC 利用回数と総合得点の散布図

[考察]

- ・総合得点とは、総括評価である。
- ・MSLC 利用回数と総合得点には相関が認められる。
($R=0.57$)

総合得点 100 点

・テスト点 60 点

・課題提出 20 点

・確認テスト 10 点

・活動点 10 点

5. 2021 年度（前期） 統計学基礎

（1）MSLC 講座と基礎力テストの関係、課題提出状況と基礎力テストの関係

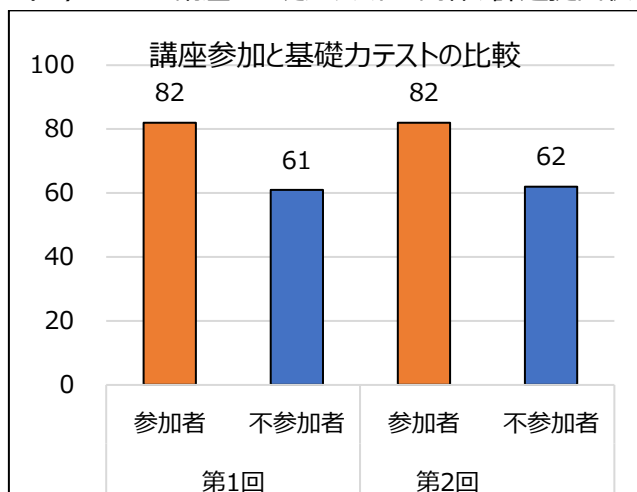


図 11 MSLC 講座参加の可否と基礎力テストの比較

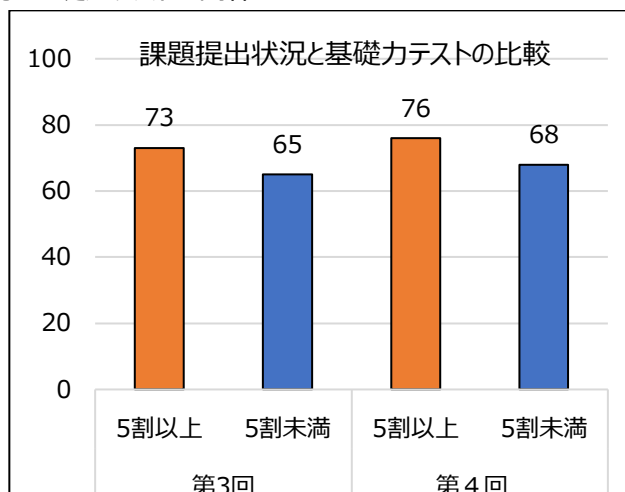


図 12 課題提出状況と基礎力テストの比較

[考察]

- ・図 11 では、基礎力テスト対策講座の参加者と不参加者の得点を比較した。受講者 32 名中講座参加者は、第 1 回目は 13 人、第 2 回は 14 人であった。2 回とも約 20 点の差があり有意差があった。対策プリントは全員に配布しているが、講座に参加しなかった人は十分な対策ができていないことが分かる。
- ・図 12 は、出題範囲の課題が半分以上できた人とそうでない人では、有意差はなかったもののそれぞれ 8 点の差があった。そもそも勉強をしないで試験に臨む人がいることが改善点である。

（2）課題提出回数とテスト点の相関

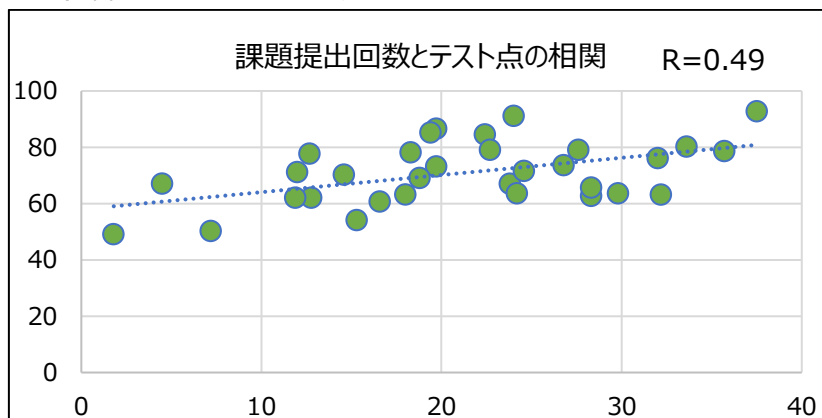


図 13 課題提出回数とテスト点の相関

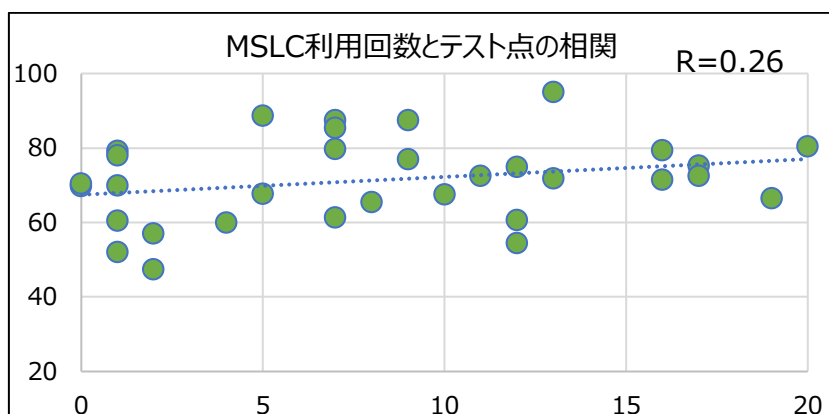


図 14 MSLC 利用回数とテスト点相関

[考察]

- ・テスト点は 4 回の基礎力テスト、中間試験、期末試験の平均点である。
- ・課題提出回数とテスト点には相関が認められる。課題をやったということは試験範囲の学習をしたということであるが、数学が苦手な学生は試験で発揮できるまでの理解ができていない人もいると思われる。（図 13）
- ・MSLC 利用回数とテスト点にも弱い相関は見られるが、MSLC 利用後の学習もなければ即得点に結びつかない人もいる。（図 14）
- ・MSLC 利用回数とテスト点には相関が認められる。（図 14）
- ・課題提出状況は総合評価に 20%加味されることもあり、MSLC 利用回数と総合評価には相関があった。（相関係数 $R=0.5$ ）

6. 2021 年度（後期） 統計学基礎

(1) MSLC テスト対策講座の参加可否による平均点の比較

表 2 講座別参加の可否とテスト平均点

テスト名	参加の可否	人数	平均点
第 1 回基礎力テスト	講座参加者	9	73.4 点
	不参加者	19	64.4 点
第 2 回基礎力テスト	講座参加者	3	45 点
	不参加者	26	62.4 点
第 3 回基礎力テスト	講座参加者	6	77 点
	不参加者	24	77 点
中間試験	講座参加者	11	72.2 点
	不参加者	17	59.9 点

(2) 課題提出回数とテスト点の相関

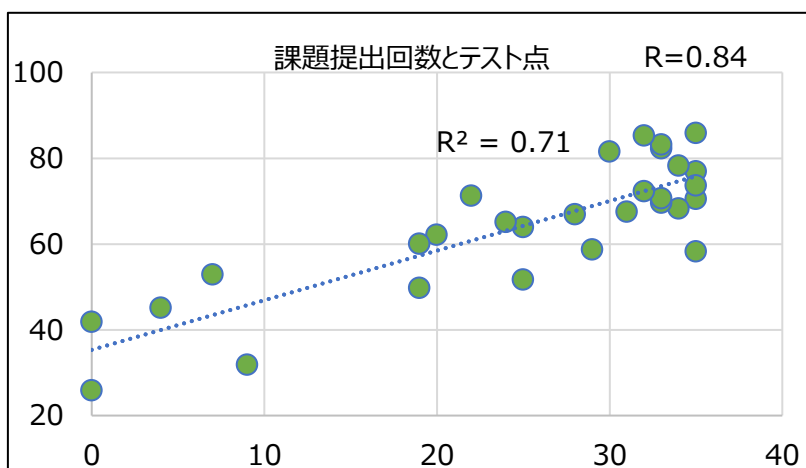


図 15 課題提出回数とテスト点の散布図

(3) MSLC 利用回数とテスト点の相関

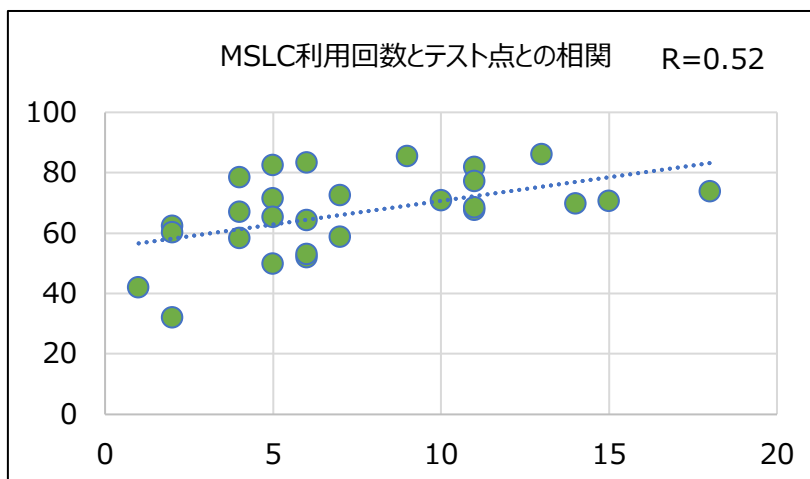


図 15 MSLC 利用回数とテスト点の散布図

[考察]

- ・第 1 回基礎力テストと中間試験では、講座参加者の平均点が高かった。
- ・第 3 回基礎力テストでは参加の可否によらずどちらも同じ平均点であった。
- ・第 2 回の基礎力テストでは、参加者の平均点が低かった。
- ・講座は課題提出後に実施するが、まったく解いておらず講座に参加したのではないかと考えられる。
- ・この結果は、病欠のための不受験者を除いたものである。不受験者と成績不審者には再試験を実施しているが、この表にはカウントしていない。

[考察]

- ・統計学基礎は基本的には対面での課題提出となっているが、この学期は、コロナ感染拡大防止のためオンラインでの課題提出も受け付けた。
- ・課題提出とテスト点には、強い相関が認められた。(図 15)
- ・課題未提出者は、テスト点も低く、結果として単位修得ができなかった。これまでの最多の 6 人が不可となってしまった。

[考察]

- ・コロナ感染拡大防止のため、統計学基礎受講者の MSLC の利用者がこれまでで最も少なく、一人当たりの利用回数も少なかった。
- ・コロナ禍でも MSLC を利用した人とそうではない人とは、テスト点に大きな影響がみられ、相関係数はこれまでの最高となった。(R = 0.52)
- ・学習センターは、統計学基礎受講者にとっては、必要不可欠な学修支援期間であることが、コロナ禍で再確認できた。

2023 年度（前期）

数理学習センター（MSLC）の利用状況

1. 2023 年度（前期）

（1）MSLC 利用状況 科目別利用状況（総数の延べ人数 869、実人数 174、科目実人数合計 179）

表 1 2023 年度（前期）連携科目等別利用状況

	統計学基礎	統計学	数学	情報科目	健康情報数学 I	その他
受講者数	30	121	22	44	44	
実人数	30	79	17	28	14	8
延人数	419	189	159	47	37	11
利用率(%)	100	65.3	77.3	63.6	31.8	
平均利用回数	14.0	1.5	9.4	1.7	2.6	1.3

[考察]

表 1 は、前期終了時（2023 年 8 月 9 日現在）の連携科目等の利用状況の結果である。

連携授業科目（統計学基礎、統計学、数学、情報科目）は、MSLC で課題の解答及びチュータリングを行っているが、課題提出はオンラインでも可能であり点検もオンラインで行っている。表 1 の人数は、MSLC での対面のみの数である。統計学基礎はできるだけ対面でのチュータリングを呼び掛けている。前期連携授業受講者の MSLC 利用率は、71%（自然科学特別講義「統計学基礎」100%、数学 77.3%、統計学 65.3%、情報科目 63.6%）であった。
 [連携授業受講者の MSLC 利用率（%）＝連携科目受講者の利用実人数÷連携授業受講者数×100]

（2）統計学基礎受講者の受講後のコメント

表 2 もし、MSLC がなかったとしたら今回の学びと何がどのように違っていたと思いますか。教えてください。

- ・わからないものをわからないままにしていたと思います。単位取得を諦めていたと思う
- ・その日限りの記憶でテストにしっかり取り組めなかったと思う
- ・時間が無く分からないまま進んでしまうことが多くついていけないと思うが、MSLC のおかげで分からないところはすぐに聞けるし、課題も一緒に教えて貰いながらできるためとても自分のためになっていると思う。
- ・何も理解しないまま講義を受けていたと思う。
- ・問題の解き方がわからないと思うので、テストなどは毎回赤点だったと思います。
- ・もしなかったら、分からなくてもそのままにしていたと思う。
- ・授業だけで終わってしまって、復習課題で分からなかったところを質問することが出来なかった。また、教えて貰っても一度復習することで理解が深まると思ったので、MSLC がなかったら、理解が進まないと思った。
- ・空きコマに教えてくれる人がいない。もし MSLC がなかったら、自分の分からない部分を分からないままにして、理解しようとしなかったと思うので、やはり、理解出来るまで問題に向き合うといったところの忍耐力や継続力などの大切さ、自分の自己肯定感を上げることができたといったところも違うところかなと思う。
- ・質問をすることが減り、自分だけでわからない問題について悩み、結局わからないままになってしまっていた。
- ・まず学ぶことすらままならなかったと思います。授業中わからないことがあっても、このあと MSLC でチュータリングを受けようと思うと乗り切れることも多かったです。

I 数 学

1. 2023 年度 数学（前期）

（1）数学受講者は数学が得意な学生も多く、MSLC を利用しない学生も課題提出はオンラインで提出しているため、MSLC 利用回数とテスト結果には相関は見られなかった。

（2）MSLC 利用回数別の学習の自己管理の自己評価結果

表1 学習の自己管理の自己評価結果（5 件法）

	学ぶ意義 理解した	目標設 定できた	計画的に 目標点検	反省点を 考えた	課題改善 策を講じた	効果的な 学習方法	目標を徐々 に上げた	目標を達 成した
0～1 回 (n=7)	4.3	4.1	3.7	4.4	4.1	4.3	3.9	3.6
2～8 回 (n=7)	4.3	4.3	4.5	4.5	4.0	4.9	4.1	4.2
11～28 回(n=8)	4.8	4.7	4.6	4.8	4.8	4.6	4.4	4.5

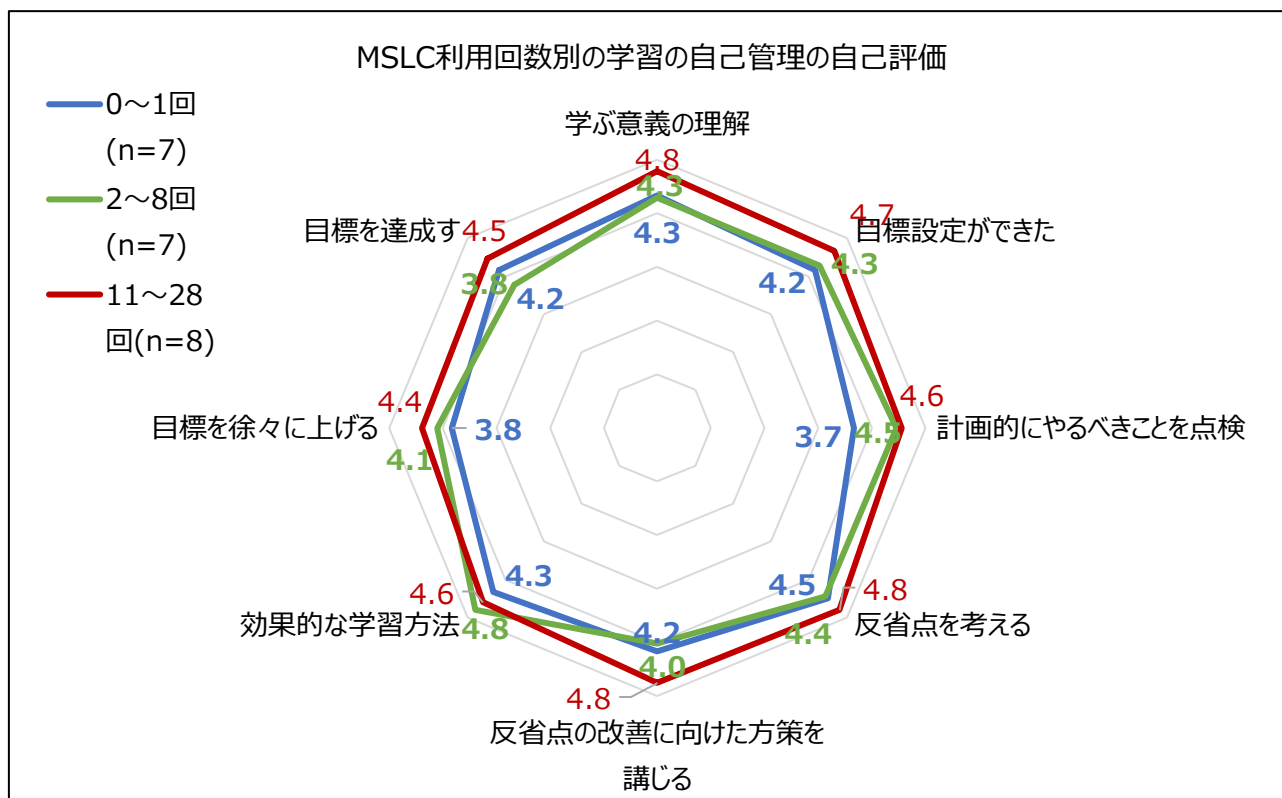


図1 MSLC 利用回数別の学習の自己管理の自己評価

[考察]

学習の自己管理の自己評価結果について、22名の回答者を MSLC 利用回数別にほぼ3つのグループ分けをして自己評価結果をまとめた。「効果的な学習方法を検討したか」の項目以外は、MSLC 利用回数の多い受講者ほど自己評価が高かった。特に、MSLC を利用が少なかった受講者は、「計画的にやるべきことを点検」出来ていなかったことが窺える。目標を徐々に上げることはできなかったが、達成できたと高評価を示しているのが特徴的である。利用回数が2～8回の受講者は、「効果的な学習方法を検討した」が最も高かったが、目標達成感が低く、もっとできたはずだという思惑も感じられる。

2. 2022 年前期 数学

(1) MSLC 利用回数と目標達成度

表1 目標達成度の自己評価 (4 件法)

	学ぶ意義の理解	数学実用的技能	論理的思考力	P C 活用力	数的推理解決力
7 回以下(n=11)	2.7	2.8	2.8	2.8	2.8
8~14 回(n=13)	3.1	3.2	3.0	2.5	3.3
15 回以上(14)	3.9	3.6	3.7	3.8	3.8

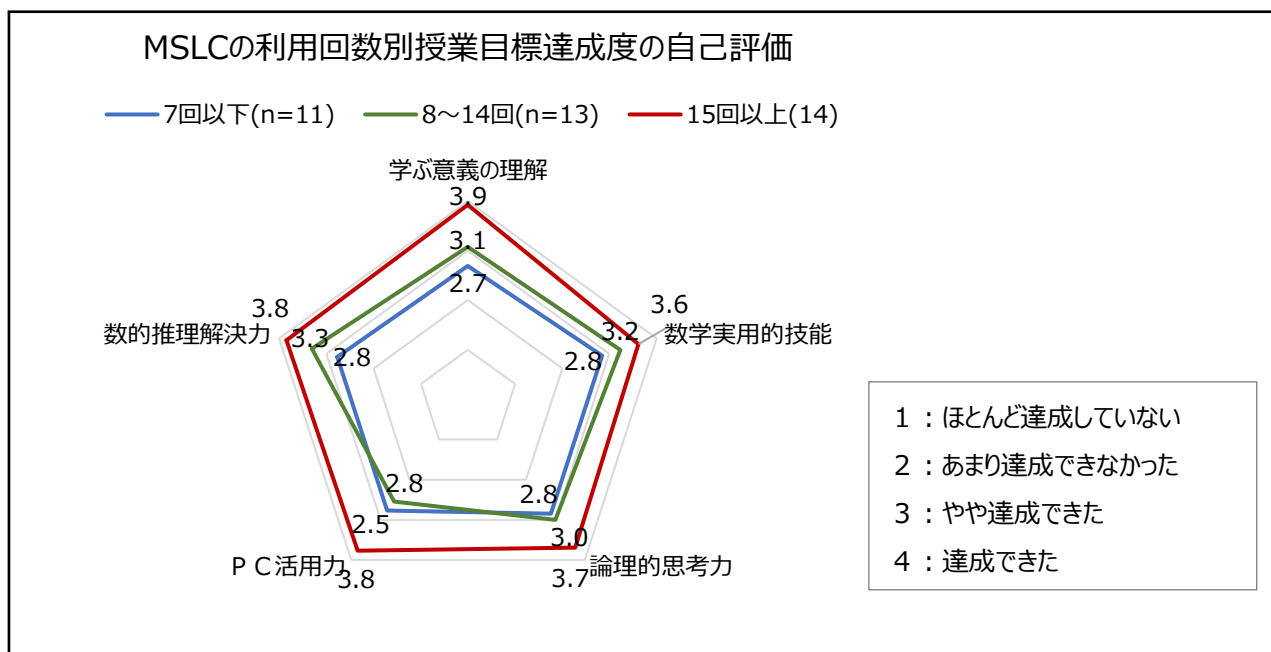


図1 MSLC の利用回数別授業目標達成度の自己評価

表2 数学の到達目標 (シラバスより抜粋 DPとは、教養教育のディプロマ・ポリシー)

到達目標
(1) 数と量の概念を理解し、数学の実用的な技能 (計算・表現・証明など) を習得する。(DP1)
(2) 数学の有用性や文化的側面を理解し、数学を学ぶ意義を伝えることができる。(DP3)
(3) 問題の文脈を解釈し数学的な解決を行う過程を通して、論理的思考力を身に付ける。(DP3) (DP2)
(4) 計算の手法を理解し、P Cを活用した解の求め方を習得する。(DP1) (DP2)
(5) 就職試験対策として SPI 数的推理問題が解けるようになる。(DP1) (DP2)

[考察]

表1、図1は欠席者1名を除いた数学受講者38名の回答があり、回答率は97.4%であった。

回答のあった38名をMSLC利用回数別に3グループに分けて実施した授業の「目標達成度の自己評価」の結果である。第1回授業のオリエンテーションでシラバスに記載している到達度目標(表2)を確認し、第14回授業で自己評価を行った。3グループの人数は、等分ではなく切れ目の良い回数で区分している。

図1から分かるように、MSLCを15回以上利用したグループの自己評価が高くなっている。到達目標(2)については、直接MSLC利用と関係はないが、数学史に関するレポートで数学を学ぶ意義について記述する課題があり、MSLCをよく利用している学生ほど、学ぶ意義を理解し、自己の学びの成果をポジティブに評価できているのではないかと捉えている。

(2) 2022 年前期 MSLC 利用回数と課題提出回数の相関

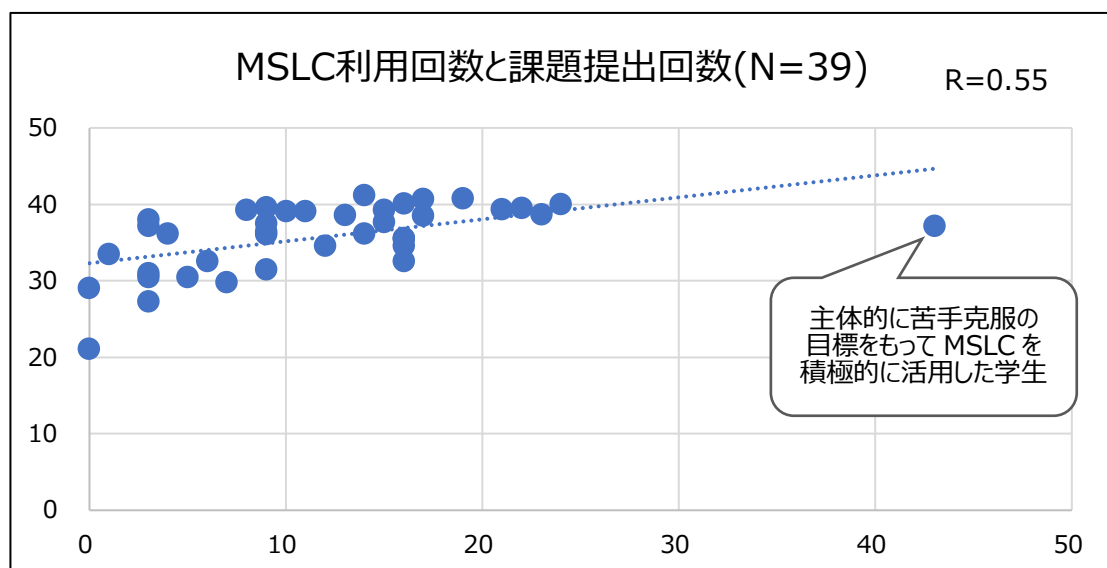


図2 MSLC 利用回数と課題提出回数の散布図

[考察]

毎回の課題提出は、オンライン提出と MSLC で点検・チューティングを受ける対面が可能である。全体的に課題提出状況は良かったが、MSLC 利用回数が多いほど課題提出率が良いことがわかる。相関係数は 0.55 であった。オンライン提出より体面での課題提出者が提出状況がよいことも考えられる。

(3) 2022 年前期 MSLC 利用回数とテスト平均点の相関

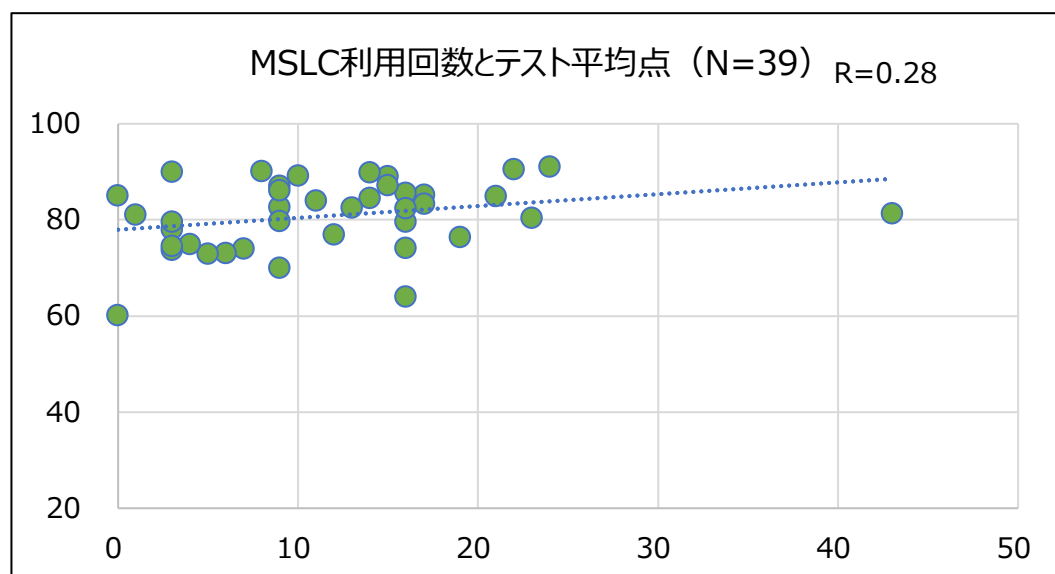


図3 MSLC 利用回数とテスト平均点の散布図

[考察]

ここでのテスト点とは、授業で学習する範囲の中間試験・期末試験と授業外学習で MSLC の支援を受けて取り組んでいる SPI 数的推理問題の中間試験・期末試験の 4 つの平均点を表す。MSLC 利用回数とテスト平均点の相関係数は 0.28 と弱い相関であるが、数学の苦手な学生がよく利用していることも要因と思われる。

MSLC 利用回数と総合得点（総括評価）の相関係数は 0.30 であった。総合得点には、課題提出点（20%）が加味されることから、図 2（相関係数 0.55）の結果から想定できる値である。

2. 2022 年度後期

(1) MSLC 利用回数と課題提出回数の相関

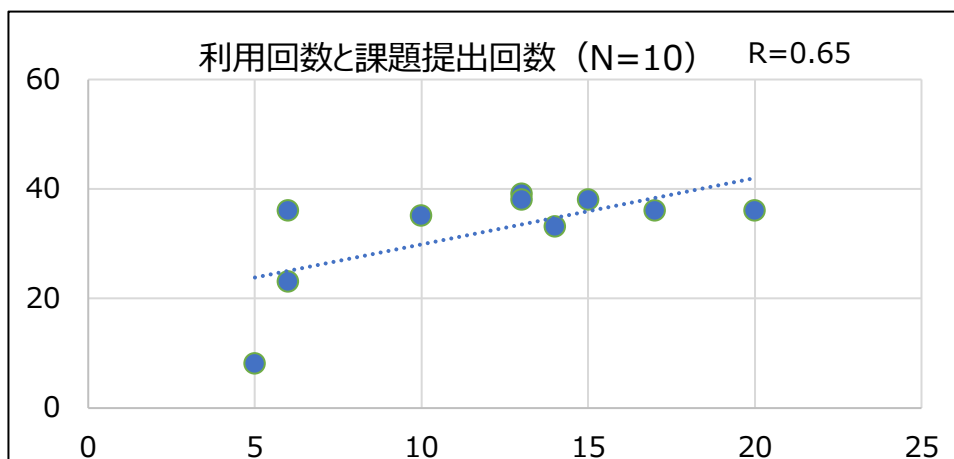


図4 MSLC 利用回数と課題提出回数の散布図

[考察] 2022 年度後期は履修者が 11 名で 1 人リタイアし 10 名であった。少ないデータでは正確な判断はできないが、MSLC 利用回数と課題提出回数の相関 0.65 となっている。図 5 の総合得点との相関係数は 0.36 で弱い相関がある。

(2) MSLC 利用回数と総合得点との相関

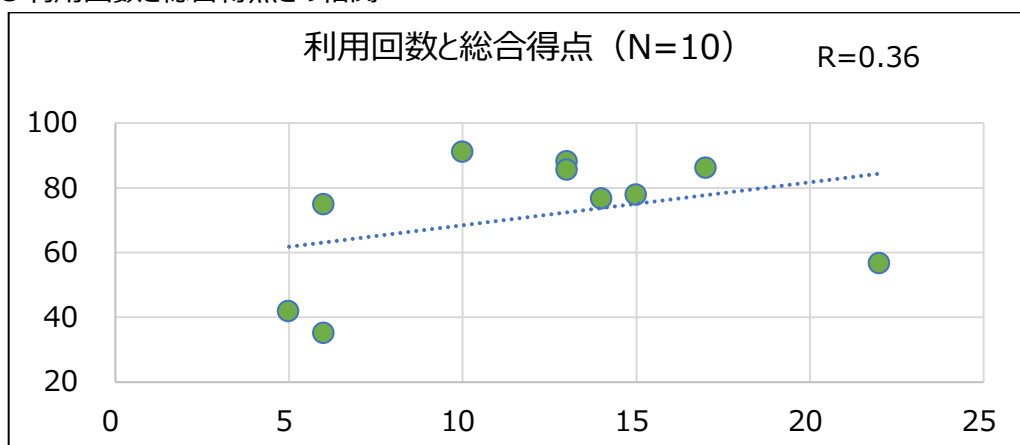
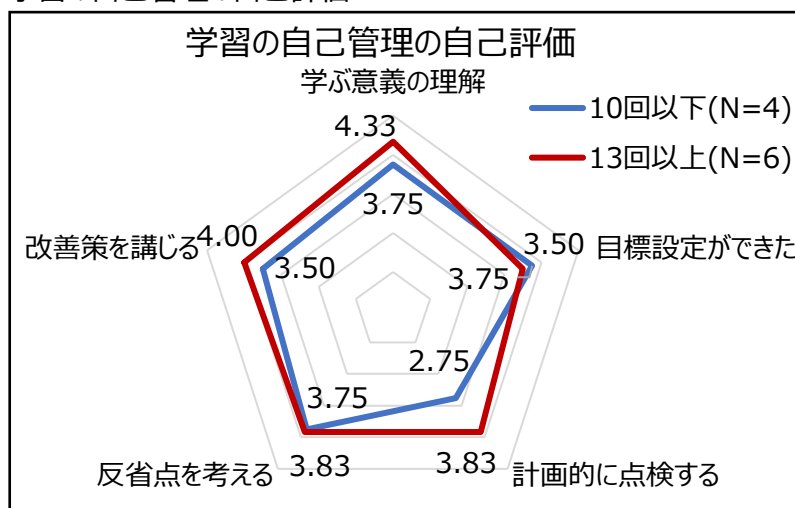


図5 MSLC 利用回数と総合得点の散布図

(3) 学習の自己管理の自己評価



[考察]

2022 年度後期は、受講者数が少なかったことから、MSLC 利用者を 2 グループに分けて、学習の自己管理の自己評価を行った。← (図 6) 「目標設定ができた」の回答は、利用回数の少ないグループが高かった。「計画的に点検する」「改善策を講じる」では、利用回数の高いグループが、自己評価も高い。

1. 2021 年前期 数学

(1) MSLC 利用回数と総合得点の相関

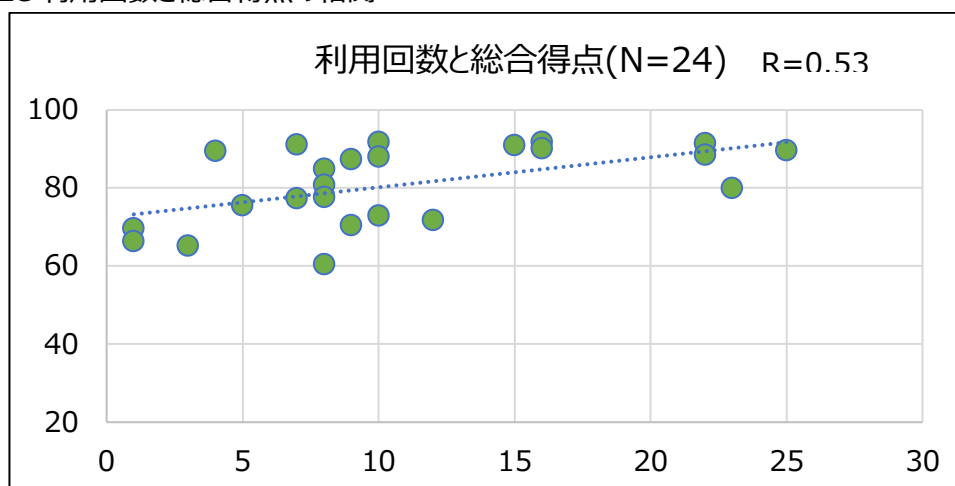


図7 MSLC 利用回数と総合得点の散布図

[考察]

コロナ禍でオンラインでの課題提出が増えたが、対面での利用者もあり、対面で MSLC の利用回数が高い程、成績のよい傾向が見られる。MSLC 利用回数と総合得点の相関係数は 0.53 となっている。

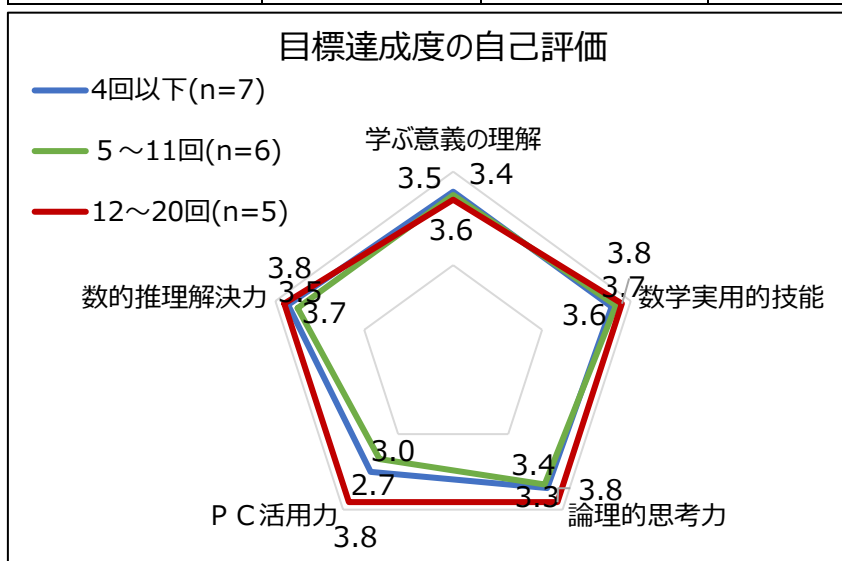
3. 2021 年後期

(1) 2021 年度後期の MSLC 利用回数と成績に相関は見られなかった。

(2) MSLC 利用回数と目標達成度

表3 目標達成度の自己評価 (4 件法)

	学ぶ意義の理解	数学実用的技能	論理的思考力	P C 活用力	数的推理解決力
4 回以下(n=7)	3.6	3.6	3.4	3.0	3.7
5 ~ 11 回(n=6)	3.5	3.7	3.3	2.7	3.5
12 ~ 20 回(n=5)	3.4	3.8	3.8	3.8	3.8



[考察]

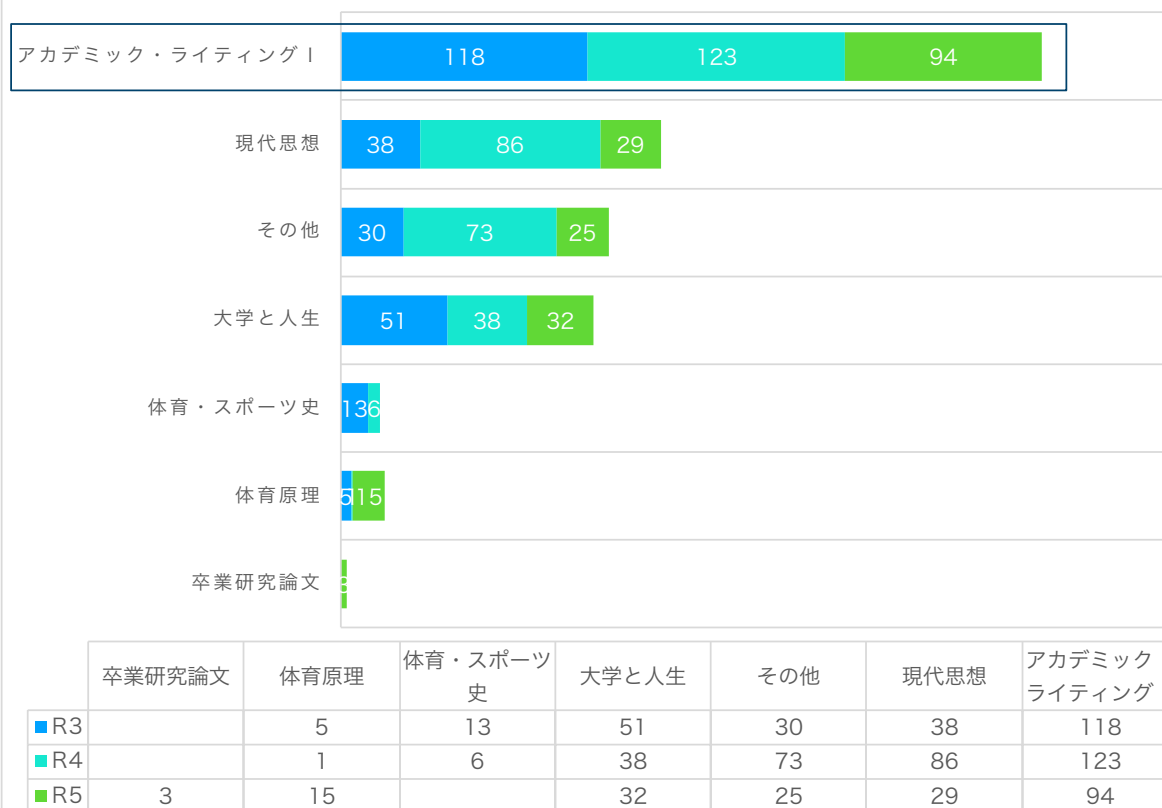
- ・回答は欠席者を除く 18 人であった。
- ・「数学を学ぶ意義について説明ができる」の自己評価が高かったのは、利用回数の少ないグループであった。
- ・他の質問に関しては MSLC 利用回数の最も多いグループが自己評価が高かった。

←図8 目標達成度の自己評価



ライティングセンターの利用状況等

MWC利用内容（2021～2023）





ライティングセンターの利用状況等

